

言葉について

こちらに来る前、本には「観光で成り立っている島なので、ほとんどの人が英語を話す。また小学生から日本語を学校で習っているの、日本人を見たら日本語で話したがる」と書いてあった。しかしそれは嘘です。確かに大中のホテルのスタッフは英語や日本語を話す。観光ドライバーの中には、すでに友達になってしまった NYOMAN のように言語が堪能な人もいます。また私のホストファミリーのようにインテリの家庭では子供でも英語を話す。しかし、その家で働いているハウスキーパーや少し身分の低い人たちはまったく英語がわからない。デパートで「いくら？」の英語でさえわからないことには驚き、こちらが習ったばかりのインドネシア語で頼まなければならなかった。短期の観光客なら言葉がわからなくても何とかなる。しかし地元の人たちと仲良くしたいなら、どの国でも、片言でもいいから現地語を使ったほうがいだろう。

私はハウスキーパーにも必ず挨拶の言葉を現地語で話した。彼女はそれが嬉しかったようで、まったく私がいわからないというのに家族の愚痴を言ってくれた。(顔で愚痴を言っているらしいと思った) 家族とは 90%英語で話した。10%は習ったばかりのインドネシア語を使った。中学生の息子さんには宿題を英語で尋ねて教えてもらった。

住まいについて

私はこの休みが終わったら再び学校へ通う。今度は学校まで徒歩で行ける所のアパートを借りる。前回事べたように月に全てがついて1万7千円前後は十分に安い。古ければ2部屋で年間8万円の家もあるそうだ。頭金などは不要で、これには水道代も含んでいる。他に電気代は2千円くらい。

だから私の来年の構想は、現地に住む日本人と少し大きな家を借りてシェアしたらいいと思っている。これなら相手も経済的に助かるし、私も日本にいる半年間の心配が減る。

先日たずねた日本人女性宅はヌサドアという高級住宅街にある。2年半前にアメリカ人から買った中古だそうだが、日本的にいうと90坪で素晴らしく素敵でおしゃれな家を全部で2千万円で買ったそうだ。日本では億になることは間違いない。そこに運転手つき、スタッフの3人で住んでいる。

文化について

ヒンズー教の信仰をしている人が殆ど。「あなたが喜んでくれればそれが一番だし、嬉しい」という考え方はその教えからきているとのこと。ホストファミリーの家族は「夜、お寺に行くから宮田も行く？」とさそってくれたことがある。正装用

のクバヤ（長袖のレースだったり、そうでない木綿だったり）とサロンというロングの巻きスカート、腰にはスレンダーと呼ばれている長いスカーフでしぼる。結婚式の時も同様にもう少し派手できれいなレースのクバヤを着る。【花嫁姿は知らないが、ママが出席したときはこうだった）先日もさそわれた。ママに「日本人は信仰している人が少ない。

私は義母が仏教の信者だったので、嫁として波風立てたくないから信者になって、まだお寺に行っているほうだけど、本当は辛いときもある。あなたはどう思っているの？」と聞いたら「幸福な気持ちになれるから嬉しい」と答えが返ってきた。

特筆するのがお葬式

日本人にとっては不謹慎だが、実に派手でにぎやかで興奮するくらいに楽しい。3回も見物してしまった。1回目はお寺でのお葬式（もしくは法事？）

いけにえなのかお寺のいり口には殺された牛（やぎ？）が花で飾られて横たわっていた。お経の声がスピーカーを通して流れてくるが、肝心の僧侶の姿は見えなかった。そのお経は日本のお経とそっくり。火の見やぐらのように高い塔にいる男は、たぶん人の名を読み上げるたびに太鼓を一つ打つ。ビデオカメラでズームして驚いた。なんと

タバコをふかしながら叩いていたのだ。その通りは何時間も通行止めになり、頭にささげ物を乗せた正装姿の女性が背筋を伸ばして歩く。

男も正装して柄の長いパラソルみたいなものを掲げて歩く。その場にいる見物客や、関係者？もみな正装姿。私も借り物の正装姿で2時間も飽きずに見てしまった。

日本のお葬式のように悲しみや静けさなどはまったくない。むしろにぎやかなお祭りという感じだ。歩道に座っている見物客目当てに、落花生や水を売る者もいる。

近所でも2回（それも同じ日、ほぼ同じ頃）お葬式があった。お寺ではないので、正装しなくてもいい。子供も大人もみな見物している。カメラ、ビデオもOKだ。同じコミュニティーの住民はみな参加しなければいけないらしくて、いつも送迎をしてくれているBAYUも私を家に送り届けると正装姿で出かけた。

一段と派手な屋根つきの小さな家のような台に白い布で覆われた棺が乗せられている。それを男たちがまるで日本の祭りで神輿をかつぐような感じで行進する。交差点にある神様を祭ってある所では一回りする。後でわかったことだが、この人々は火葬場まで行き、しかも最後までいるそう。その先は日本とはまったく違う。骨ではなく、灰にして海に流すという。だから個人のお墓はない。各村や町内に一つ大きなお墓があるそう。



